四、漠河隊

アムールの船旅 (1)

ここで、日づけは一と月あまり逆行して、ハルビンからの鉄道の終点、アムール河にのぞんだ黒河の町にもどる。

ながい冬ごもりのあと、アムールの河すじの解氷をまって、モーホへとさかのぼる、この年の初航船は、いま黒河の埠頭をはなれようとしていた。五月一六日の正午だった。モーホへは、八日ばかりの航程である。

はじめてみるこの大河のゆるやかな流れは、われわれを、さまざまな思いに駆りやった。クマラ河やパンガ河、あるいはやがてわれわれがさかのぼるはずのアルバジハ河などの支流によって、北部大興安嶺の水の大部分をうけいれ、さらにとおくシベリアやモンゴリアの水までをあわせはこんで、河はば一ぱいの流れは、たえまなく東へと去っていった。うっとうしい空もようの下を、氣味わるくにごってうごく、この満々たる流れのなかには、本隊の通路にあたる、ガン河の水さえまじっているのだ。何年間もむなしく夢にえがいてきた、未知の大興安嶺の尾根や谷のありさま、そこにひろがる野地坊主の濕地や山腹をおおうカラマツの林、いままで地図にさえ満足にえがかれたことのないふくざつな地形や、あるいは白馬もそのために黒くなるといわれる、おびただしい吸血性昆虫の発生地の模様にいたるまで、われわれの知りたいとねがう祕密のすべてを、この流れはすでに知りつくしているのだ。それらの祕密を意地わるくおし包んだまま、われわれがこれからこころみようとするはかない探檢の努力を、さながらあざけるかのように、河は、ことさらにゆっくりと動いてゆく。その水をこえたはるかな対岸には、ブラゴエシチェンスクの町の白壁やあかい屋根が、ねずみ色の空を背景に点々とちらばって、う

つくしく眼を射た。

しかし、そこは、もはやわれわれの立ち入りをゆるさない世界であった。河を横ぎろうとする小舟の姿さえなく、流れは両岸のあいだのすべての連絡と接触とをたち切っていた。渡ろうとおもえば渡れないのではない。埠頭のかたわらに立つ放送塔の拡声器の声は、ひろい河はばをこえて、たやすく対岸にとどくであろうし、双眼鏡をもちいたなら、向う岸をさまよう人々の姿をとらえることもできよう。しかしわれわれには、そこにゆき、それらのひとびとの手をとってともに語ることが許されないのだ。單に國境という一本の線が、地図上で、この河のまんなかに引かれているというだけで、おなじ人間どうしの接触が、文化の交流が、生活の協力が、むざんに断たれなければならないとは、いったいどういうことなのか。われわれが手を振ればかれらも手を振り、われわれがほほえめばかれらもまたほほえむであろう。たとえ民族がちがい、習俗をことにしていても、人間としての親しみや愛情は、だれとでも持ちうるというのが、われわれのいままでの旅行からえた体験であった。しかも、この河をこえようとするこころみのすべては、おそらく射撃によってむくいられ、牢獄におわるであろう。たとえその越境の意図が、單に、シベリアの曠野をさまよいその自然にひたり、そこにすむひとびとの文化にしたしくふれてみたいという、ただそれだけの願いにすぎなかったにせよ……。シベリアの水と滿洲の水とは、いまここにまじりあって流れているのに、人間だけはべつなのだ。その現実の暗さが、対岸のうつくしい風景をさえ、かえって重圧と感じさせ、おもわずそちらに背をむけさせるのであった。

埠頭には、初航船をみおくる人たちが黒山をなし、船室にすしづめになったひとびとと、口々に別れをさけびかわした。どらが鳴り、船と陸とをつなぐ板橋がはずされて、船はしずかにうごきはじめた。見おくりの群集からは、「ほたるの光り」の歌ごえがわいた。熊沢さんやその母堂や、省公署の役人たち、新聞記者などの見おく

りの姿がちいさくなり、黒河の町は、しだいに遠ざかっていった。

船は、二〇〇トンばかりの小蒸汽船で、薪を燃料としている。船室は、上下二段にわかれ、最上層は、ひろい甲板になっていた。ふつうのスクリュウのかわりに、おおきな車輪をふたつならべ、そのあいだに板をうちつけた、水車式の推進機が、船尾でゆっくりと廻轉して水をかいた。それは、フロンティアにふさわしい、なにかロマンチックな氣分をおこさせた。長春から黒河へくるまでに、おいぬいてしまった春に、まるでおいつかれまいとつとめるかのように、水車は茶褐色の雪どけ水をけんめいにかきわけ、まがりくねった河すじを流れにさからって、けんめいに西北へとさかのぼりつづけた。

両岸は、たいてい山腹が水ぎわまでせまり、はじめのうちは、モウコナラやハルニレなどの廣葉樹の疎林がそのうえをおおっていた。地表は、おち葉で一めんに黄いろくいろどられて、秋かとおもわせるほどであった。ところどころ南むきの斜面だけが、シラカンバの白い肌にぎっしりとうずめられていることもあった。木々の葉は、まだ芽ばえず、はだかの枝だけが、さびしげに手をうえにひろげていたけれども、その色あいには、すでに春のいぶきがどことなく感じられた。場所によっては、山が河岸から遠くしりぞき、シラカンバの点在する平原が、河とのあいだにひろがっている。すると、シベリアがわでは、しろい壁やあかい屋根の比較的まばらな村落が、満洲がわでは、黄いろい土壁、黒い屋根のかたまった聚落が、姿をあらわす。水路の関係で、シベリアがわの岸ちかくを船が通ると、流れで衣類を洗うカチューシャかぶりのロシア娘のかれんな姿が、頭をあげてわれわれを見おくった。子どもたちもあつまって、ものめずらしげに、船のゆきすぎるのを見まもっている。しかし、そんな平和な風景ばかりがみられるわけではなかった。あちこちの崖のうえには、鉄條網をはりめぐらした、ソ連の監視所らしいものが立っていた。双眼鏡をむけると、むこうからも眼鏡でみているのがわかる。「写眞をとる

と射たれるかもしれませんよ」と船員が注意した。船のほうにも、数名の日本兵がのりこんでいた。あるとき、ひとつの船室のとびらがあいていたので、なにげなくのぞきこむと、かれらは、窓べに身をかくしながら、ソ連がわを見張り、なにごとかを机上の地図にかきこんでいた。ここではすでに、國境をはさんで、みえないたたかいがはじまっているのだった。

船には、日本婦人がかなりたくさん乗っていた。みな奥地に勤めている日本人の奥さんたちで、申しあわせたように小さい子供たちをつれている。この人たちは大部分、昨年國境の形勢が険悪だというので日本に引きあげたところ、一應情勢もおちついた形ちになったため、ふたたびもとに帰る途中であった。そのなかに一と組だけ夫婦づれがいて、ほかの奥さんたちの羨望の的になっていた。しかしこれらの奥さんたちも、まもなくそれぞれの主人のもとへ帰れるというので、いたってほがらかであった。目的地に着いてからの生活の淋しさは、この人たちの頭から、今のところ忘れ去られているようであった。

船は、ときどき、満洲がわの小さい村々に足をとめて、こうした奥さんたちのいく人かをおろしていった。船がとまると、村ぢゅうの老若男女が、去年の秋いらい半年ぶりに外界の空氣をもたらすこの初航船を見るために、埠頭にあつまってきた。氷がとけ、ヤナギの芽がふくらみ、迎春花（インチュンホワ）とよばれるオキナグサが紫の花をひらくとともに、ひとびとが一日千秋の思いで待ちこがれてきたこの初航船である。青い綿入れのみすぼらしい服をきた農夫たちは、岸べに人垣をつくり、ながい冬ごもりから解放されたよろこびに笑いさざめき、荷上げされる物資をみては、安堵に浮かれさわいだ。赤いよごれた着物の子どもは、ひきつめ髪の母親に手をひかれて、ふしぎなものでも見るように、船の姿をながめいっている。そのうしろの耕地はまだ土が黒く、家々の黄いろの土塀とはっきりした色の対照をしめしている。その土塀も、なかばくずれかかっているものがおおかった。

ある小さな村での、みじかい碇泊ののち、うごきはじめた船の甲板から、わたくしは、なごりおしげに見おくる群集を、なにげなく眺めていた。するとふと、埠頭からすこしはなれた河べりのヤナギの茂みのかげに、めずらしく洋装の若い婦人がただひとり、腰をおろしてこちらをじっと見つめているのに氣がついた。近い距離ではあったが、念のために双眼鏡をむけてみると、その顔はまぎれもなく日本人だった。おそらくは、村に駐在する警察官の奥さんでもあろうか。この小さな村の様子からすれば、たぶんその夫をのぞいては、ほかに日本人とて住んでいないであろう。語りあう友もなく同胞からとおくはなれ、郷愁にかられながら異境の奥地にくらす淋しさが、その表情にきざまれていた。ひさかたぶりの故國のひとびとを、ただひとり默然とみおくる心情をおもえば、正視にたえなかった。船は速力をまして、しだいにとおざかり、やがて流れの屈曲をまがるとともに、その小さな人かげは、眼界から去った。

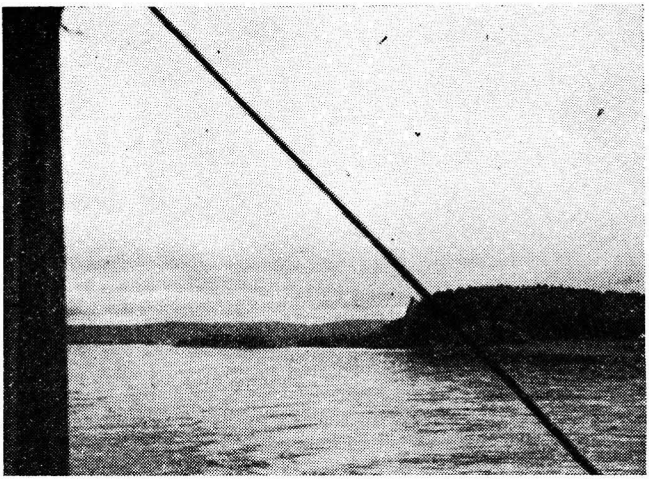

図 46. アムール河.

二日、三日と上流にすすむにつれて、両岸の風景もしだいに変化をあらわしてきた。はじめは、廣葉樹のあいだに、部分的にちらほらとすがたをみせていたカラマツが、鷗浦をすぎたころから、しだいに勢力を増し、アカマツやシラカンバをまじえて、色彩はゆたかになった。カラマツの灰褐色の小枝が、たがいに交叉するあたりに、ほのか

にうす緑のヴェールがかぶさったようにみえるのは、すでに芽がうごきはじめたことをしめすのであろう。これからさき、われわれが、あけても暮れても、そのなかでのみ生活しなければならない大樹海の、これがはじまりであった。

この北國では、天候のちがいによってうける氣分の相違は、おどろくばかりであった。あお空がひろがり、陽がさんさんとさしてくれば、山腹のカラマツも江岸のヤナギも、あるいはちらほらみえる部落も、春の樂しさにかがやいてみえるが、一たん雨がふりだせば、たださえ濁っているアムールの水は、陰うつな空の下に一そう黒っぽく、じめじめとした寒さが身にしみて、オーバーなしに甲板にでれば、身ぶるいしなければならないぐらいであった。せっかくの春がふたたびひっこんで、みじめな冬がまた帰ってきたような氣もち、そんなときにはわれわれは、船室にひっこんで、うす茶をたてては氣分をなぐさめることにしていた。隊員のすべてにとって、これはなによりの樂しみで、わたくしが茶をたてるといえば、みなはりきって湯をくんできたり、船の賣店からようかんを買ってきたりした。河水をわかした湯には、色がついていたが、黒河での評判では、この水は茶にもってこいだということで、味はちっとも氣にすることはなかった。

日の暮れるのはおそく、晴れた日では、午後八時すぎても、日本の五時くらいの感じであった。船の通ってきたあとの江上に、夕日に赤くそまった雲が移り、すくすくとのびたカラマツが、山稜にくっきりと姿をうかばせている光景は、さながら一幅の絵であった。夜は星が宝石をちりばめたよう、北極星の高さはわれわれに異境にある身をおもいださせた。（以下一〇節　森下）

アムールの船旅 (2)

日々の船上生活のあいだに、わたくしは一五—六歳のかわいいシナ人のボーイとなかよくなった。夜、空いた食卓で、手紙など書いているわたくしのところへ、かれはよくやってきて、片言のシナ語のわたくしと、とんちんかんな会話をとりかわしては笑いあった。ある朝かれは、甲板にいたわたくしをとらえて、きょうの午後船がつくところへ上陸すれば、とてもいいものがあるからといって、見ることをすすめた。いいものとはどんなものだときいても、とてもきれいなものだからぜひ上陸してごらんなさいと笑うだけで、くわしいことは話さなかった。話しても、わたくしに理解できるように説明するのは、むずかしい、と思ったのかもしれない。午後になって船がついた場所は、河ぞいには家もみあたらない、シラカンバ林をうしろにひかえた埠頭であった。薪積みのための碇泊である。隊員たちは、釣り竿をもちだして、船尾で魚釣りをはじめたが、わたくしは少年のことばに好奇心をそそられ、とにかく上陸してみることにした。岸に上ると、道はすぐあかるいシラカンバの木立ちのなかに分けいってゆく。さしたる傾斜もない、ひろい段丘の林のなかに立つと、まるで信州の高原をさまよっているここちであった。登山者が群れあつまる日本の高原とちがっているのは、どの一本の樹を見ても、皮をはがれた跡ひとつない、すんなりとした白いうつくしい肌をもっている点であった。陽はささなかったけれども、この氣もちのいい林のなかで、わたくしの心は喜びにみち、上陸をすすめてくれた少年に感謝したい氣が一ぱいであった。すこしゆくと、林間に小さい空き地があり、そこに先に上陸した同船の日本人が七—八人かたまって、なにかを眺めていた。近よってみると、それは、ケズネアカヤマアリとよばれる赤蟻の、おおきな山形の巣だった。

おち葉をあつめてつくったその巣は、高さ八〇センチばかりのみごとな円錐形をなし、空き地のなかにただひとつ、地表からつき立つその姿を誇っていた。

「これはなんでしょう。」とひとりがわたくしにきいた。

「アリの巣ですよ。」

「このなかにアリがいるのですか。」

「いるでしょう。」

とわたくしは枯れ枝をさがして、すこしその巣をつついてみた。表面にはまだ出ていなかったが、かきまわされた部分からは、数匹のアカアリが姿をあらわし、のろのろと巣のうえをはいまわった。夏ならばおそらく活潑にとびだし、棒をつたって手にまでかみつきにくるであろうが、春さきのこととて行動は敏活を欠いていた。

「まだすこし寒すぎるのですね。」とわたくしはいった。

するとひとりが

「じゃ、あたためてやろう。」

といきなりポケットから紙きれを出して巣のうえにおき、マッチをすった。ほかのひとりが、小さな枯れ枝を数本その上にくわえた。火はパチパチとはぜてもえあがり、巣の表面を焦がした。わたくしはなにか胸の苦しくなる思いで、このいたずらを眺めていた。とめようかとも思ったが、それもおとなげないような氣で傍観していた。アリはさらに何匹かはいでて、火のまわりをうろついたが、火はひとしきり燃えさかったあげく、しだいにおとろえていった。わたくしはふと、このなかまのアリが蟻酸をだして火を消すという、荒唐無稽の說を思いだしたが、このときのアリは、もちろんそんな行動をとったわけではなかった。アリの出かたがすくないのは、冬

眠からさめてまもないので、巣の成員の大部分が地下の坑道にひそんだままだったためであろう。しかしひとびとは、もっとたくさんのアリを見つけだそうとして、手に手に枝をとって巣をかきまわした。ついにあのみごとな巣は、いまは見るかげもなく破壊され、もえくずと散乱した枯れ葉のなかに、わずかのアリがあてもなくうごめいていた。罪もないアリが営々としてきずいた成果にくわえられたこの残虐も、もとをただせば、わたくしが最初に巣をつついたのからはじまったことである。わたくしは、後悔の念に胸を嚙まれながら、船にかえった。

船がふたたび動きだしてから、甲板で景色をながめていたわたくしの横に、ボーイはまたやってきた。「あんたがこわしたんだろう」と少年の声がふるえた。わたくしは、愕然としてふりかえった。その顔は怒りにもえていた。このときはじめてわたくしには、少年のすすめてくれた「いいもの」が、なんであったかがわかった。あのアリの巣だったのだ。あの巣こそは、單調な船の上り下りに、少年の心を慰めていた宝物だったのだ。少年はあとから上陸して、われわれ日本人の心ないしわざの結果を見たのであろう。おそらくは半年ぶりに、その巣をみる樂しみに、心をおどらせていったであろうに。わたくしは一そう悔恨の念にせめられ、わびたいと思ったが、てきとうなことばを知らなかった。「夏になればまた巣をつくりなおすだろうから、心配しなくてもいい」といってなぐさめようとも思ったが、それもことばが不自由で、口にすることができなかった。それに、たとえそれをいってみたところで、いまさら何になろう。ことがらは小さくても、信頼をうらぎられた少年の心の傷は、もはやなおすすべはないのだ。一度うえつけられた「日本人」への不信の念は、年とともに成長するであろう。われわれの「こどもっぽい」いたずらの結果は、そのような民族間の心の溝をつくるきっかけとなりはしなかっただろうか。責任はわたくしにあった。立ちさった少年は以後わたくしと口をきこうとはしなかった。船にいるあいだ、なんとかして和解の道を講じようと、わたくしのほうではつとめたけれども。

船は、しだいにモーホへとちかづいていった。ときおり、ちいさな流氷が、船の近くを流れてゆくのをみるようになった。江岸にも、氷の堆積がだんだんふえてきた。たいていは黒くよごれているが、なかには、眼のさめるようにまっ白なのもある。ある夜、シベリアがわの切り立った崖が、あかるい火花をとばしてもえているのをみた。河に面した、露出した炭層がもえているのだった。ときどき、ひとかたまりの火のだんごがくずれおち、中途で岩にあたってくだけては、こまかい火の流れが、矢のように河におちる。船員は、こうして何十年ももえつづけているのだと説明した。事実、前世紀末にここをとおったプルシェワルスキーは、ちゃんとこのもえる崖のことを、記録にのこしているのである。われわれは、花火でもみるようなその光景を、あきずにながめて立ちつくした。このあたりから、アムールの谷は、壮大な峡谷となった。両がわを切り立った崖にかぎられたなかを、ゆたかな濁流は、崖から崖へといっぱいに流れる。峡谷にはいっても、依然としてくりかえされる、はなはだしい蛇行は、いっそう峡谷の印象をふかめた。ゆくてに立ちふさがって、航路をさえぎるかとおもわれる大岩壁が、船のすすむにつれて、クルリと向きをかえて、また新らしい岩壁を前にむかえる。おおくの旅行者たちが、くりかえしてほめたたえているように、モーホからアルベジンのあたりまでの峡谷は、アムールの河すじゆびおりの風景といえよう。[1]

峡谷の側壁は、どこまでいっても、カラマツの一色におおわれている。しかし、モーホにちかく、流れが東西に走っている部分では、しばしば、シベリアがわだけが、シベリアアカマツばかりの林となって、満洲がわと河ひとすじをへだてたばかりに、林相が一変しているような印象をあたえた。これは、のちに説明されているような、南斜面の岩礫地をこのむアカマツの性質と、斜面の向きの組みあわせとのつくりだした、一種のトリックにほかならない。崖をのぼりきって、シベリアの台地上に達すれば、そこからは、やはり、カラマツの樹海がはじ

まっているにちがいないのである。

いよいよモーホが近づいて、われわれの胸には、まだ見ぬこの町への興味が、しだいに高まってきた。われわれは、出発のまえ、この町についての、さまざまのうわさをきいていた。金鉱町のなごりで、おまけに軍隊も駐在していないから、人心は殺伐をきわめ、二挺拳銃が横行して、武装しないでは町もあるげないともきかされていた。それなら、まるでゴールド・ラッシュ時代の、西部かアラスカの金鉱町そっくりではないか。一九四〇年代にそれがあじわえるなら、これはえがたい体験である。長春をでるまえから、学生隊員たちが、この町にかけていた期待は、けだしたいしたものだった。もっとも一方では、われわれの輸送しようとする大量の食糧が、掠奪のうき目を見はしないかということも、一時はまじめな話題にのぼりさえした。もし事実そのおそれがあるものならば、それそうとうの心がまえがいるだろう。二四日の朝、予定より一日おくれて、船はしずかにモーホの埠頭についた。

図 47. アムール峡谷のソ連がわの岸にみられる，シベリアアカマツの林.

みたところ、埠頭ちかくには、洋館もあって、なかなかりっぱな町の様子である。歓呼する黒山のような人の群れが、しだいにまぢかにせまったとき、わたくしは、群集の前に立って手をふる、先発の江原のすがたをみつ

けた。飛行機でモーホにとんでいらい、電信の不通のために、江原との連絡はまったくきれていたので、万一かれがふたたび空路黒河にひきかえしてこないかという、ゆきちがいの心配がなくなって、われわれはホッとした。船がとまり、橋がかかると、江原は、まっさきにはせあがってきて、われわれの手をにぎった。かれは、あおいシナ服をきて、どうやら、かくしには、小型のピストルをしのばせているようだった。二〇世紀の金鉱の町は、一と月まえの学生を、はやくも一人まえのフロンティア・マンにしたてあげたらしかった。

〔註〕

① たとえば、鳥居龍藏（一九四三）黒龍江と北樺太。東京。

ジェルトゥガ共和國

モーホの町の歴史は、興味津々たる一篇の物語りをなす。それが興味をひくのは、單にこの附近がかつて一大採金地であったというばかりでなく、短期間ではあったが、一時はいずれの國の支配をもうけない、採金者を中心とする一小独立國を形成していたという点にある。一八九八年出版のポズドネエフの滿洲記には、これをジェルトゥガ（漠河）共和國とよんでいる。

この附近に金を産することは、すでに一八六〇年、ロシアのコサックによって発見されていたが、以後一八八三年までは、小規模の密採掘がおこなわれてきたのみであった。ところが、この年、ひとりのオロチョンが、ジェルトゥガ川①の野地に母の墓地を掘ろうとして、偶然若干の金塊を掘りあて、これを採金業者のセレドキンに通知したのが、モーホ金坑繁栄のいとぐちであった。セレドキンから派遣された技師は、第一回の試掘でたちまち

好成績をえた。それから正式の採掘がはじまったが、技師はそのうち乱酔のすえ、半死半生でロシア領にはこび去られ、のこされた労働者たちは、勝手にじぶんの所有として採掘をつづけた。とかくするうちに、前代未聞の豊富な金坑の発見のうわさは、アムール一帯からザバイカルにかけて一めんにひろがり、おおくの職工や勤め人は、それぞれ仕事を放棄して、われ先きにと金坑にむかい、そのほかよその金坑の脱走囚人、流刑人、冒険者たちもこれにくわわった。数ヵ月にして、いままで人煙稀であったこの地の労働者の数は、たちまち五〇〇〇ないし七〇〇〇人に達し、人種からみても、ロシア人・シナ人・朝鮮人・オロチョン・ユダヤ人・フランス人・ポーランド人・米國からわたってきた冒険者など、ほとんどもれなく各國民の代表者をあつめていた。一八八四年から八五年にかけては、最小限に見つもっても、一〇〇〇〇人以上に達していたものとおもわれる。

採金者の群れとともに、商人もまた移動をはじめた。最初のうちは、これらの住民に対する食糧供給者は、國境附近のコサックであったが、人口増加とともに、おいおい遠方からも小商人があつまり、乾パン・牛肉・穀物・火酒・アルコール・諸道具などを仕入れてきては、ひじょうな暴利をむさぼった。物價は、下流の町にくらべて、二倍から四倍に騰貴し、そのうわさによって、ザバイカルの商人や一般住民は、いっそう動揺した。イルクーツクの市民でさえ、じぶんの不動産を賣り、家財を賣り、すべてを質入れして、食料品・織物そのほか諸雑貨を仕入れて発送するものが続出し、ウェルフネ・ウジンスク、ネルチンスクなどの市民も、これにならった。またたくまに、この地の商店や遊興場の数は、一五〇軒にも達し、賣れゆきの王座は強烈な酒類であった。紙幣は流通高が不足し、決済はおおく金をもっておこなわれた。ホテルもいくつか建てられ、数戸のパン製造所、動物園、銭湯、手品師や曲馬師などの興行物、樂隊などもあらわれ、数ヵ月まえの野原に、忽然としてヨーロッパ風の天地が出現したのであった。労働者は、すきまを苔でふさいだ丸太小屋に收容され、四〇〇以上のこれらの

丸太小屋が、中央廣場からのびる道の両がわに街をかたちづくった。廣場に面するジェルトゥガ金坑政庁の前には、二門の大砲さえそなえつけられた。横の祈禱所には、脱走囚人の読経僧および司教がいて、つねに申しぶんなく勤行し、組織ができあがってからは、公費支弁の病院も建設された。

金坑の住民は、脱走囚人や一攫千金を求めるものなど、雑然たる寄りあい世帯であったが、そのうちおのずとひとつの組織ができあがった。はじめは、女は入れられず、純然たる男の國であったから、住民はおおくの組（ひと組は一〇—一五名）にわかれて、作業や生活をおこない、全部の組を三区にわけて、各区に区長を選挙し、その区の秩序をたもつことにした。区長は小事件を裁決したが、重大な事件は住民大会によってこれを決した。しかし、初期には盗みや紛争、各種の暴行沙汰が絶えず、投機熱と賭博の流行とが相まって、町は百鬼夜行の狀況であった。区長でさえも、盗みをはたらいては逃走し、あるいは捕えられて、ながくつとめあげるものはまれであった。暴力と混乱とが町を支配し、秩序と安寧とは姿をひそめた。

しかしついに、ひとつの事件がきっかけとなって、住民はたちあがった。一八八四年一二月、ある日の白晝に、ひとりの厨夫が鉄槌によって、残忍きわまるやりかたで殺害された。この知らせをうけて、秩序を求める住民たちはけっ起して集会を開き、六日間の論議ののち、風紀と秩序とを独裁で維持する一名の主権者を選出し、すべての住民を支配する権限をあたえた。主権者には、ジェルトゥガ金坑長老の称号が、衆議によりあたえられた。えらばれた新長老は、教育もあり清廉潔白な人物で、そのうえ生來の精力家であった。労働組合と区とが再編成され、区長の選挙制と権限とが確立し、裁判制度と刑罰とが決定された。重大事件と非常の場合は、大砲を発射して住民大会を召集するほかは、長老がおもなことがらを決定した。犯罪に対する処罰には、たとえばつぎのようなのが定められた。

殺人罪に対しては死刑
窃盗に対しては五百打
男色その他不自然な罪悪及び犯罪に対しては五百打
醉態で武器を携帯したものに対しては五百打
砂金の僞造に対しては五百打
正当な理由なくジェルトゥガにおいて発砲したものに対しては五百打

以上の犯罪に対しては、笞刑とはいえ、いばらのようにするどい釘を打ちこんだ鞭によって打たれたから、ほとんど死刑にひとしいものであった。軽犯罪に対しても、こまかい規定がもうけられた。たとえば

金坑に婦人をつれてきたものは棒をもって四百打
夜間騒いだものは二百打
公然醉態を演じたものは杖をもって一百打

などであった。なお「ジェルトゥガにおいて刑罰を受けた者は、この地に帰還の権利を剝奪して直ちに放逐し、且つ犯罪を嫌忌して悔悟の念を起させるため、境界において更に百打を加える」と規定してあった。

人種・階級・國籍の別なく、何人もこの法令には服從の義務があった。まず手はじめとして、まえに犯罪をおこなったものに適用して、一日のうちに殺人犯人三〇名を絞刑に処し、ついで各種の重軽罪犯人に対するおそろしい笞刑が、二週間つづいた。この苛酷な法令の実施は、はたしてたちまち効果をあらわして、不良分子は影をひそめ、一同はことごとく新制度に服した。

ジェルトゥガの秩序が回復したうわさが、全ザバイカル州につたわると、商人はさらにぞくぞくとこの地につ

めかけ、しばらくのうちに、常住商人はその数三〇〇にも達した。そのほか、肉類などの商品を、附近の村々からここの市場にもってくる行商人もひじょうにふえ、物價もしだいに低まった。法令にしたがって、一般の商品に対しては賣り上げの一割、アルコールに対しては二割五分、料理屋・遊興所の経営者に対しては毎月收入の二割の営業税が課せられ、金坑政庁の会計員は、毎月徴税の收支計算書を作成して集会に提出し、集会はまたいつでもその提出を請求する権利があった。税收は、役員の給料、一〇〇—一五〇名の守衛の手当、病院の維持などにあてられた。守衛は、一般の秩序をたもつため、三組の巡察隊を組織して、毎夜町を巡察し、同時に消防の役も兼ねていた。

採金作業は、数名、十数名、数十名などからなる、おおくの組合單位でおこなわれ、組合員は、階級の差別なく、すべて一様に仕事をする義務があった。住宅・道具・馬およびそのほか労働用必需品の購入資金は、各組合員が同額ずつおさめ、採取した金も、組合員全体の費用を引きさった残額を、作業の種類如何をとわず、毎日平等に分配した。あたらしく組合に加入しようとするものは、組合員全部の承諾を要した。組合は、人数九名に対してそれぞれ採掘予備坑を二つずつ持つことを許されたが、のこりの予備坑はジェルトゥガ自由金坑組合員全体の所有として、政庁の選衡によって、必要に應じ適宜に分配された。こうしてこの新天地に、共産主義的色彩の濃厚な生産組織が、他から隔絶してつくり上げられたのであった。

自由金坑の存続期間中の採金量を、精確に推定することはむずかしいが、一八八三年の秋から一八八五年の春までのあいだに、ゆうに七〇〇〇キログラム以上には達したであろうと考えられている。もっとも採掘量のおおかったのは一八八三年の冬で、八四年の冬になると、それほどおもわしくなくなり、八五年には一そうその量がへった。それでも、八五年の三月、ロシア領の哨兵線でたまたま抑留されたジェルトゥガ退去者の所持金だけで

も一一〇〇キロにのぼったという。

そのころ満洲の官憲は、この辺境地区に対しては、ほとんど注意をはらわず、アムールの全沿岸にわずか六ヵ所の國境監視所をもうけているにすぎなかった。それさえも形式的で、監視兵でじぶんの任務が何かを解するものすらまれであったといわれている。しかし、モーホ金坑がさかんとなり、一二〇〇〇人の坑夫があつまったという評判が高くなって、満洲がわもはじめておどろき、瑷琿（アイグン）の副都統は、ロシアがわのアムール総督とのあいだに、ロシア人の満洲領内における金の密採取について、交渉をはじめたが、その交渉はなんの成果をもたらさなかった。業を煮やした清國政府は、一八八五年の秋、この金坑に討伐軍をさしむけ、ジェルトゥガ破壊を開始した。金坑がわは、抵抗したけれどもついに敵せず、あくる年の一月共和國はほろび、すべての労働者は追放され、建設物は焼きはらわれた。勇敢なものは、立ちとどまって生命を犠牲にした。こうして、瞬間のうちに出現した小新國家は、また瞬間のうちについえ去ったのである。[3]

共和國のほろびたあと、シナがわでは一八八八年に漠満会社をもうけて採金をおこない、守備隊をおいて金坑の保護にあたった。しかしそれもつかのま、一九〇〇年の北清事変のとき、モーホの町は破壊され、守備隊および住民はちりぢりとなり、そののち一九〇六年まで、ロシアは、モーホその他のアムール右岸の地方にシナ人の立ち入りを許可しなかった。一九〇六年ロシア軍の占領が解かれて以來、シナの採金業者や商人は、この地方にかえりはじめ、金坑はふたたび開設されたが、採金量の減少と相まって、共和國のころの繁栄はもはや見るよしもなかった。一九一七年のシナがわの調査によれば、モーホ金坑の坑夫は二四三〇人、漠河縣内のほかの金坑をも全部あわせて、採金量はおよそ三〇〇キロであった。満洲事変以後は、満洲採金会社がモーホに支分所をおき、附近の採金に従事しているが、もとのジェルトゥガ金坑の経済價値は、もはや、いうに足りないものとなっ

てしまった。現在モーホの町の南方二〇キロばかりのところにある小部落老溝（ラオコウ）が、かつての金坑の所在地である。

〔註〕

①ジェルトゥガの名は、いまも一部でもちいられているようである。たとえば、プレチュケの地図には、ラオコウから東に流れるアルバジハ河の支流に、シェルトゥガ（Scheltuga）の名を記入している。この川の川原では、現在でも、砂金の採掘がおこなわれ、シナ人は老溝河とよんでいる。

②ジェルトゥガ共和國の詳細については、満鉄調査部資料第六号、「黒龍江省、下巻」をみよ。

モーホでの準備

さて、なによりもわれわれの氣がかりだったのは、モーホでの物資の調達であった。黒河では、冬ごもりのあとのモーホには、ほとんど食糧などはのこっていまい、という意見がつよかった。しかし、初航船にのりこもうとすると、黒河でいろいろな物資――ことに食糧をととのえているひまはなかった。わたくしは、こう判断した。一〇〇〇人の人口が冬ごもりするのに、五日分や一〇日分のゆとりがなくて、どうするのか。しかも、われわれの必要量は、おおいとはいえ、その一日分にも足りないだろう。そのうえ、たとえわずかでも附近に耕地をもっているこの町では、縣公署の手持ち食糧は切れてしまっても、どこかに品物はあり、品物さえあれば、購入の道はあるにちがいない。第一、初航船そのものが、そうとうの食料品をつんでゆくはずだ。この判断にもとづいて、われわれは、どうしてもモーホでは手にいりにくそうなものだけを、黒河で買いととのえ、救急品や乾パンなどは、あとから航空便でおくってもらうことをたのんで、とるものもとりあえず船にのりこんだのであっ

た。

まず第一に、モーホの縣公署をおとずれてみると、あらかじめ江原の交渉もあって、すべては順調にはこんだ。食糧をはじめ、馬も馬夫も、必要なものは、みな手にはいるみこみがついて、ひとまずホッとした。モーホの食糧欠乏の話は、事情をしらぬ黒河の役人のとりこし苦労にすぎなかったのだ。ただ、このあたりの馬には、駄載の習慣がないので、駄載用の鞍だけがなかった。乘用の鞍をつかうほうが、あとでつぶしがきいて好都合だろうと考えていたが、それも借りることができなかったので、荷物鞍をおおいそぎで造らせることになった。

土地の人たちが、輸送についての話のたびに、問題にしたのは、ここでもやはり、馬糧のことだった。もってゆく馬糧の予定量がすくないというのだ。草だけを食わしてゆこうというのは暴挙で、それでは馬がみな死んでしまうだろうともいった。しかし、馬の数と馬糧の数量との堂々めぐりを知っているわれわれは、頑としてゆずらなかった。けっきょく、ひとびとも、説得をあきらめたかたちになった。

つぎにわたくしのおとずれたのは、警察本隊長だった。まだ長春にいたころ、なにがしという匪賊の頭目が、一〇人ばかりの部下をつれて、この山中ににげこんでいるというわさをきいていたので、その狀況をたしかめるのが目的であった。隊長も、そのうわさは知っていたが、われわれのゆく方面では、まず心配はなかろう、と語った。話題は、モーホの町の治安狀態にうつった。治安のよくないことは、事実であった。とくに冬の結氷期には、殺人や誘拐がひんぱんであるという。事件をおこしても、氷をわたって対岸のソ連領ににげこむ途があり、また日本人は、往々にして、対岸へ拉致されるおそれがある、ということであった。しかし、それらのことばから判断して、治安のわるいのは、金鉱町のなごりというのではなく、むしろ、風雲急をつげる辺境の國境町の性格であり、しかも、日本人の統治にたいする反感のあらわれとみるべきであった。はじめからスパイのうた

がいの眼をもって住民に接すれば、いつかは全住民がスパイ化する日がくるのではなかろうか。

隊長は、われわれの隊に、警備をつけることをすすめたが、わたくしはそれをことわって、ただ通訳をひとりせわしてほしいとたのんだ。さいわい、日本語のじょうずな警士がいるから、あす宿舎によこしてくれることになった。

それから、さらに話はうつって、オロチョンのことにおよんだ。隊長は、かれらが、ときどきこの町へも、毛皮をもって、交易のためにあらわれてくると語った。わたくしは、ふと思いついてきいた。

「いったいトナカイには、どのくらい荷がつめるのですか。」

「さあ、五—六貫はつめるでしょう。」

そのとき、わたくしの頭にひらめいたのは、馬のかわりに、トナカイを輸送につかえないか、という思いつきであった。そうすれば、馬糧のことに思いわずらう必要もなくなるだろう。地衣類を主食とするトナカイを併用すれば、もってゆく最少限度の馬糧の量も、うんとへらすことができるはずだ。しかも、トナカイをつかうことは、同時にオロチョンをつかうことでもある。それは、オロチョンの調査に、なによりも好都合なばかりでなく、かれらの生活手段である狩りは、食糧としてけものの肉を補給してくれるだろうし、もっともてきとうな道案内ともなるであろう。

「オロチョンをやとう方法はないでしょうか。」

と、わたくしはたずねた。

「そうですね。うちの警察官に、張貴堂（チャン・クェイ・タン）という、オロチョン係りがいるんですがね。それにきけばわかるんですが……。ちょうどいま、奥へでかけているんです。よろしい。お入用なら、さっそくラオコウの駐在所に

連絡して、よびもどすようにはからってみましょう。」

「ぜひ、そういうふうにお願いします。」

もしこれが成功すれば、予想外の收穫だ。わたくしは、満足して宿舎にかえった。

隊員たちは、それぞれ活動をはじめた。町の事情にあかるい江原は、鞍や馬の調達にあたり、加藤は、食糧うけとりの手つづきや作業を、川添は、こまごました物品の買い入れをうけもった。無電技士の本郷さんは、さっそく、本隊との無電連絡をこころみた。わたくしは、かたずをのんで、でっぷりとふとった本郷さんの手もとをみつめた。この連絡の成功不成功は、探検の成否に関する重大問題であった。とうとう、本隊の電波は、レシーヴァーに断続音をたてはじめた。テストは、大成功だった。本隊は、予定どおり、ガン河ぞいに行進しており、基地に着くのは、一〇日ぐらいおくれるみこみ、とあった。基地でおちあう予定は、六月一五日ごろとなっていたから、一〇日おくれるとして、二五日ごろとなろう。場合によっては、もっとおくれることも考えて、こちらの食糧準備をすこし追加する必要があった。基地までは、途中の滞在をふくめて二週間でゆけるみこみだったから、本隊との会合までにはゆっくりすぎるほどのゆとりがあった。しかし、支隊のほうは、おそらく急速度で白色地帯を突破してくるものとみて、それよりはずっと早く基地に着いている必要があった。わたくしは、いちおう、二八日にモーホを出発する予定を立てた。二八日までには、註文した鞍もできるはずだった。氣づかっていた、救急品や乾パンも、ぶじに飛行機で着いていた。計画は、ようやく軌道にのり、すべてのめんどうは、すでに去ったかにみえた。

もうひとりの隊員は、測量隊の松本さんである。四五歳くらいだが、年よりはふけて、好々爺という感じをあたえた。船のなかでは、釣り道具の手入れと釣りとに余念がなかったが、上陸すると、さっそく活動にうつり、

滞在三日めの午後には、町はずれの丘におかれているはずの三角点をしらべに、ひとりででかけていった。ところが、かならず帰ると約束していった五時になっても、宿にすがたをみせない。五時半まで待ったが、まだ帰らなかった。治安のわるいというのが、どの程度かははっきりしないが、万一のことを考えると、すててはおけなかった。わたくしは、はじめて武器箱をあけ、拳銃に弾丸をこめた。弾倉に弾丸のおしこまれる音が、ちょっとしたスリルを感じさせた。拳銃ほしさにおそわれることを考えて、腰につったうえからレインコートをきた。とっさの場合は、ポケットのよこの裂け目からとりだすことができる。見つかっても見つからなくても、一時間以内にはかえると、ひとり部屋にいた川添にいいのこして、宿をでた。ほこりっぽい、せまい通りを町のうらへぬけると、飛行場になっていた。その南は、耕地や濕地の原をへだてて、カラマツのおおったひくい丘が東西に走っていた。三角点のあるはずの丘にけんとうをつけて、まっすぐにあるきはじめた。すると、いくらもゆかないうちに、ゆくてに人かげがあらわれ、ちかよってみると松本さんだった。「やあ、どうもすみませんでした」とかれは恐縮したが、わたくしのほうは、一と安心するとともに、おおげさに心配したのがかえって氣はずかしかった。

そのあくる朝には、ひとりの若い警察官がわれわれの部屋に案内されてきた。隊長にたのんでおいた通訳だった。まだ一八—九歳だろうか、こどもっぽい顔つきだったが、はっきりした日本語で、「関警士です」と名のった。いろいろ話したすえ、「銃器は?」ときくと、「騎銃をもってゆきます」とこたえた。警察官の立場として、たとえひとりででも、われわれの護衛の役をひきうけようと、けなげな決心をしているらしかった。のちに、護衛というよりはむしろマスコットのようになった、この関さんをさいごに、隊員の顔ぶれもすっかりきまったわけだ。

つぎの日は、準備のゆとりもできて、町をひとまわりまわってみた。金坑がおとろえてからは、この縣城も人口一〇〇〇にみたず、埠頭からの表玄関は、ちょっとりっぱだったが、町の様子は、みるかげもない。ひくい屋根、せまい通り、ほこりの道、電燈もなく、まばらに開いた店にも活氣がない。人口をやしなうに足りないわずかの耕地と、これだけは豊富にあるが、はこび出しの不便な木材と、ほそぼそとした金坑のなごりとが、ようやくこの町をささえているのである。白系ロシア人を妻としている家庭がおおいというが、町にはそのすがたをみうけなかった。われわれの宿舎は、ただひとつの日本旅館で、かなりおおきな建物のうち、あたらしく増築したばかりの、壁もまだかわききらぬさっぱりとした部屋が、われわれの本拠であった。

その前夜、この宿のおかみさんが、わたくしのところにやってきて、すこしもじもじしたあげく、おもいがけなく、こうきりだした。

「あの、お茶道具をちょっと貸していただけませんでしょうか。」

わたくしが、毎夜、隊員たちをお客に茶をたてているのを、みていたのである。

「お使いになるのでしたら、どうぞ。」

おかみさんは、ことばをつづけた。

「じつは、きょう近くの日本人の奥さんたち四—五人あつまったので、あなたがお茶道具をもってらっしゃる話をしたのです。そうすると、日本をはなれて何年ぶりかに、ぜひお茶の会をやってみたいという話がまとまりましたので、このようにおねがいにきたのです。」

「僕もなかま入りさせてもらえませんか。」

「とてもとても。みんなお茶なんかすっかりわすれてしまっているのですもの。」

とわらいながら、道具をかかえて、うれしそうに走りさった。

朝になると、おかみさんは、にこにこしながら、道具をかえしにきた。

「いかがでした。」

「それがたいへんでしたのよ。」とおかみさんはまえおきして、つづけた。

「ひさしぶりで、みんなきちんとならんで、さてたてようと思ったら、お茶をさきに入れるのか、お湯をさきに入れるのか、だれもわすれてしまっていて、すっかり大わらいしてしまいました。」

このとおい満洲の果てにまで、さまざまな苦労をかさねてわたってきた婦人たちにとって、昔ならいおぼえたお茶が、どんなに郷愁をそそったか、そして、おかしさと昔なつかしさに、眼に涙をうかべて笑いころげながら、ほろにがい感傷をおぼえたであろうありさまが、わたくしの眼にうかんだ。

鞍の完成がおくれて、出発はやむなく三〇日にのびた。ところが、そのひまを利用して、二八日に一同そろって郊外に遠のりをこころみたとき、わたくしは、あばれ馬にのりそこねて、したたか腰をうった。宿にかえりついて、馬をおり、さてあるこうとすると、腰のうえに猛烈な痛みを感じ、自由に足をふみだすこともできなくなったのを知った。あくる日になっても、あいかわらず立ち居がままにならなかった。このまま動けなくなろうとは思わなかったが、長途の旅行にたえるかどうかおぼつかなかった。責任のあるからだで、かるはずみな行動にでたことを、わたくしはひどく自責した。隊員たちの説得にまけて、わたくしはもう一日出発をのばした。そのかわり江原と加藤とが、予定の日にラオコウに先発し、オロチョンやといいれの交渉にあたることになった。チャン・クェイ・タンが、きょうあすにもラオコウにかえってくるはずだ、という連絡をうけていたからである。

ふたりの出発したあと、のこりの隊員は、あとかたずけに忙殺された。腰のいたみは、まだはげしかったが、

がまんすれば、あるけないことはなかった。それに、だんだん快方にむかっているという自覚が、わたくしをよろこばせた。

三一日の朝、まだ暗いうちに、二三頭の馬と三台の馬車が、宿の裏門でひしめいた。二石六斗の米と、四四〇キロの白麵(パイメン)、それに乾燥野菜・パン類・テント・無電器材・大工道具・馬糧などが、馬のいななきと馬夫のかけごえとのさわぎのうちにつみこまれた。関警士をふくめた隊員は、武装して、隊列の先頭から後尾までに、てきとうな間隔をおいて配備された。

「出発!」

きょうの行程は、ラオコウまで。モーホの街路は、まだほの暗かった。

第一歩

町はずれの濕地をぬけるあいだに、夜はすっかり明けはなれた。しかし、行進は遅々としてはかどらなかった。駄載になれていない馬夫は、荷のつけかたが下手で、たちまち荷物のずり落ちが続出した。馬二頭あたり一名の馬夫では、いちどずり落ちた荷物をもとにかえすのに、おそろしく時間がかかった。あわててつけなおした荷物は、しめかたがわるいために、またすぐずりおちて、よけいに時間を食った。ぬかるみにかかると、事態はいっそう悪化し、泥に足をとられた馬が、いたるところに立ち往生して、はいだそうとしてもがきはねるあいだに、荷物はせなかから廻轉して、よこ腹にひっかかった。馬車のわだちも泥にくいこんで、貧弱なからだの馬にとっては、ぬけだすのにひと苦労であった。まだ山にも入らず、本格的な濕地でもない町はずれでこの調子では

さきにはいったいどうなりゆくことだろう。

それでも、どうやら濕地はぬけきって、山道にかかった。道は、カラマツの林をぬけて、だらだらと登ってゆき、地表はようやくかたく、隊の進行は、どうにか順調にはこびはじめた。ゆるやかな波狀地形をのりこえてゆく道の高みに立つと、木立ちの切れめから、すばらしい眺めがのぞいた。黑々と木におおわれた山なみの重なり、樹海ということばは、なんとよくこの森林帶の性格をあらわしていることであろうか。このながめこそ、大興安嶺の眞價というべきであった。わたくしは、行進も腰の痛みもわすれ、ながいあいだ立ちつくして、そのひろがりに見とれた。

図 48. 峠のほこら.

尾根のカラマツ林のなかには、ところどころ大きな空き地ができていて、そこを、大小の角礫が一めんにうずめているのが、注意をひいた。大きなのは直径一メートル以上、小さいのは五センチから一〇センチくらいの礫であった。この礫原との初対面は、本隊の隊員たちにたいしてと同様、わたくしにも、いろいろな疑問をなげかけた。

谷をよこぎるところには、ちょいちょい丸太づくりの小さな小屋がたっていた。伐木の小屋ででもあろうか。そういえば、道ばたの林にも、わりあい若木がおおく、老樹は、まばらに頭をぬいている程度であった。そのあ

たりの峠には、小さい祠もたてられ、なかには、日本の峠の地蔵のまえによく見られるように、休み場所として腰かけまでそなえてあるのもあった。祭られているのは、山神①、土地神②、胡三太爺③など、満洲の山間部に普遍的に見られる神々であった。

眼のさめるような肌色のシラカンバも、カラマツにまじっていた。尾根のカラマツの若葉のあいだに、あおあおとした葉をみせているのは、シベリアアカマツの一と群れであろうか。まるでハイキングのように、景色をながめながら、坦々たる道をゆっくりとあるいてゆく氣分は、およそ探検という感じからは遠かった。ただ、そのんびりした氣分をうちこわすものは、調子づいてかたわらをあるいてゆく駄馬の列、車のひびきと、それからだんだん強くなりはじめた腰の痛みとであった。晝食のためひと休みしてからは、痛みはますますひどく、一と足ずつふみだすのにも忍耐を要した。馬車にものってみたが、でこぼこ道の振動が、いっそう腰にこたえるだけだった。それからあとは、もう景色をみる元氣もなく、ただのろのろと足をはこんだ。隊列は、つぎつぎとわたくしを追いこしてすすみ、とうとうただひとり取りのこされて、歯をくいしばりながらあるいた。休めばもう立ちあがれないかもしれないという心配から、腰をおろすこともできなかった。こうやってあるいてさえいれば、いつかはラオコウにたどりつけるだろうというのが、ただひとつの希望であった。さいどの何キロかを、どういうふうにあるいたかは、じぶんでもはっきりわからないが、氣がついたときには、ラオコウ警察隊の門に立っていた。

門をくぐると、中庭いちめんに、われわれの馬車や馬がならび、荷物はおろされて、倉庫にはこばれていた。隊員にむかえられ、駐在の新井警士にあいさつし、荷物の整理をしばらくながめていたことまでは、おぼえているが、それからさき、部屋に通されたのも食事をとったのも、もはやおぼろげである。わたくし自身は、元氣そ

うにふるまっていたらしかったが、一刻もはやく横になり、不動の狀態で苦痛をやわらげることだけが、内心のねがいであった。ただ、チャン・クェイ・タンがまだ帰ってきていないと聞いたことだけは、頭にのこっている。

〔註〕

① 山神は、山の平和と狩獵とをつかさどる神で、一般に主神はトラだといわれている。しかし、小興安嶺東南部のトラの棲息地では、シナ人の獵師たちは、トラを山神爺とよび、山神と区別していた（一九四三年秋の森下・中尾の調査による）。

② 土地神は、五穀豊穣の神で、白髪黒衣の老爺としてえがかれる。

③ 胡三太爺は、一般に胡仙とよばれる。白ひげの大太爺、黒ひげの二太爺、ひげのない三太爺によってあらわされる。胡仙は、胡・黄・白・柳・灰の五仙にわかれ、胡はキツネ、黄はイタチの一種の黄鼠狼、白はハリネズミ、柳はヘビ、灰はネズミの精であって、いずれも豊饒利殖授子の神とされる。

最初のトナカイ・オロチョン

眼がさめたときは、外はもうあかるく、かがやかしい太陽の光りが中庭一めんにさしていた。腰の痛みはずっとすくなくなって、この分ならまだあるけるという自信がわいてきた。そこへ、もうきちんと服をつけた関さんがとんできて「オロチョンがきています」と報告した。

表へ出てみると、夫婦と子どもづれのオロチョンの一家が立っていた。男は黄いろの上着にズボン、巻ゲートルのいでたちで、ゴム底のズック靴をはき、これがあの狩猟民族かとうたがいたくなるような、一見町の労働者風であったが、コサック帽と肩からかけた小さい皮かばん、腰にさげた大型ナイフだけが、エキゾチックな感じをあたえた。妻は、頭を黄いろいプラトークでつつみ、ひざまである外とうの下から、ひもでゆわえたなめし皮

の長靴[1]をのぞかせ、おなじような靴と学生帽の、かわいい二—三歳の男の子をだいていた。母親にまつわりつくように、三人の子どもたちが立っていた。一三—四歳の女の子は、肩まで髪をたらし、ロシア風の青赤のいろどり美しい上衣とスカート、くびかざりをつけ、のこりのふたりの男の子は、つめえり服に皮ズボン、皮靴をはき、ひとりは防寒帽、ひとりは父親とおなじ型の帽子をかぶっていた(図版一四ページ、中段)。ツングース族特有の切れながの眼、とび出した顴骨、黒い直毛やひくい鼻を見なかったなら、女や子どもたちの外見では、ロシア人の一家とまちがえそうであった。男は人のよさそうな顔に笑いをたたえて、頭をさげ、子どもたちははにかんで、母親のうしろにかくれた。

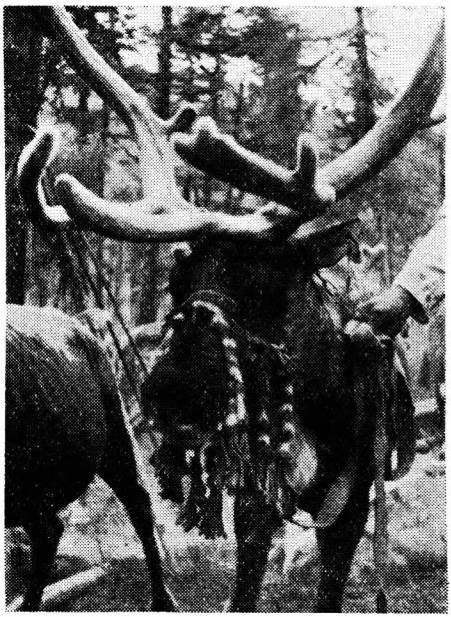

図 50. トナカイ.

建物のうらにまわると、丸太を立てならべてつくった塀に、一〇頭ばかりのトナカイがつないであった。トナカイのくびや頭には、皮製のかざり(図49・50)をつけ、せなかには、前後のふちの突出したかわいい木鞍がおかれて、そのうえをシカの毛皮がおおうていた。からだは想像したよりも小さく、みごとな角をつけた雄で髻甲高一一〇セ

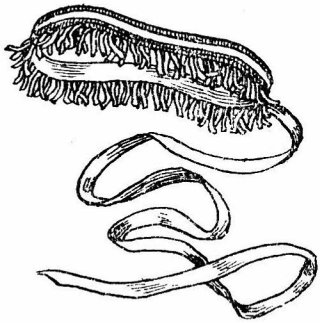

図 49. トナカイのくびかざり(ハンダハン皮製).

ンチばかり、ほかのものは一〇〇センチ前後と目測された。ほかに仔が二頭、これはつながれもせず群れのあいだにまじっていた。

このオロチョンたちは、モーホへでる途中に立ちよったもので、主人の名はルカシカといった。わたくしは、なんとかしてわれわれとの同行をなっとくさせようと決心し、きょう一日滞在ときめた。馬車だけはもう用ずみなので、モーホへの帰りじたくをはじめ、隊員はのどかな春の日をたのしむために、荷物の監視係りだけをのこして、自由行動をとった。わたくしは、ルカシカとともに、村はずれに立ててあるというそのユルタをおとずれることにした。

駐在所の門をでてすこし下ると、砂と小石の川原のなかを、はば一〇メートルばかりの小川が、日にきらめきながらサラサラと音をたてて流れていた。ラオコウ河であった。川原に砂の小山がいたるところ起伏しているのは、かつての砂金採りのなごりであろう。いまは川に砂をあらう人かげもなく、つみ上げられた堆積も、流路の変化によって、ふたたび川のなかにけずりおとされ、あちこちでその断面をあらわに見せていた。一万ものひとびとの一攫千金の夢のあとには、ただ枯れ草や灌木が、いたずらにおいしげっているのみであった。

ルカシカは手に大なた[2]をもち、せなかには長い旧式の銃をかけたまま、かるがると川をわたり、野地坊主をとびこえて、わたくしを案内した。腰の痛みのぬけきらないからだには、あとを追うのがひと苦労であった。やがてカラマツの林があらわれ、低いイソツツジの下生えをわけて、すこし奥へはいると、そこの空地にユルタが立っていた。長さ四メートルたらずのほそい木を円錐形に組みあわせ、外がわを綿布でおおうただけのもので、入り口といっても、ただ骨組みにおおいをしていない部分というにすぎなかった。中央には太い薪が何本もほのおをあげており、それをかこんでユルタのふちに沿い毛皮がしかれて、かばんや包みなどが、その上におかれてい

図 51. トナカイ・オロチョンのかりのユルタの内部.

た。ユルタのまんなかをよこぎって一本の横木がわたされ、それから両端をかぎの手にまげた鉄棒がぶらさがり、その下端につり下げたやかんは、ちょうど火のま上に位置して、湯氣をあげていた。ルカシカの妻は、小さいほうの子をつれてすでに帰りついており、ホウロウびきのわんに茶をついで、わたくしにすすめた。妻は入口からはいって左がわにすわっていたが、これがきまった妻の座であるのかどうか。すわった姿勢が、日本人のようにいつでもその姿勢でいるわけでもないらしく、ちょっと立って座にかえったときは、片ひざを立てたモンゴル式のすわりかたになった。家財というほどのめぼしいものは見あたらず、わん類ややかん類のほかは、メリケン粉をこねるシラカンバの皮製の容器や、こなをのばすのにつかうらしいまるい木盤などが、眼にとまったくらいであった。③ 一—二日のかりのすまいと

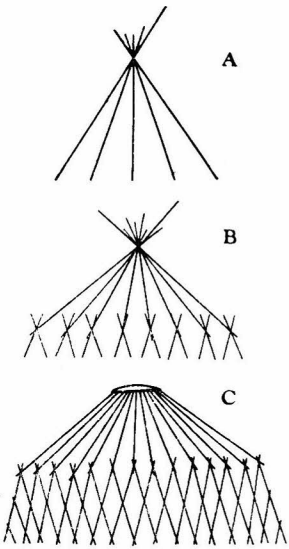

図 52. ユルタの構造の複雑化の系列. A (円錐型), B (円筒円錐型), C (パオ型).

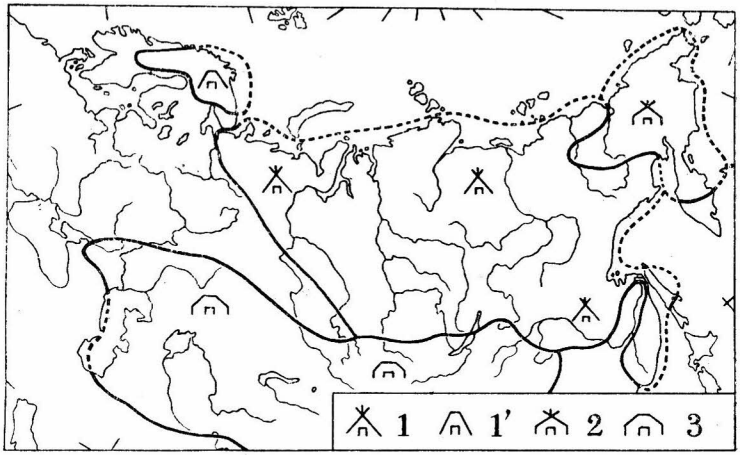

図 53.　北方アジアの移動民族の住居形態分布図.　1：円錐型ユルタ，　1′：おなじくラップ式，　2：円筒円錐型ユルタ，3：パオ型ユルタ．Buschan 1923 により一部補正.

いう点も手つだってか、④ユルタの印象はぜんたいとしてみすぼらしく、駐在所でみた女の子のはなやかな服装とは、およそそぐわぬものがあった。これにくらべると、おなじ移動式のすまいとはいえ、モンゴリアのステップにおける蒙古包（パオ）のほうが構造からいっても、垂直の壁面をもつだけに、はるかにすぐれており、家具の豊富な点からいっても、ずっとゆう福さを感じさせる。

オロチョンのつくる円錐形のユルタは、シベリアにひろく分布するツングース族のあいだに普遍的な住居の形式である。図53にみるように、その分布圏の南方は、モンゴル族やトルコ族のパオ型ユルタの分布圏に接し、東方はチュクチ、コリヤーク、サモエードなど、いわゆる古アジア族の円筒円錐型ユルタの分布圏に接している。円筒円錐型ユルタというのは、ちょうど円錐型とパオ型との中間型にあたるもので、円錐型のユルタを円筒型の台のうえにのせただけのものである。これのいっそう複雑化した形がパオ型であると考えるならば、円錐型—円筒円錐型—パオ型という住居型式の一系列が、ここにできあがるわけである。ユルタ内の空間利用という見地からいえば、このうちパオ型がもっとも進んだ形であることは論をまたない

が、そうかといって、オロチョンたちの移動生活にも、やがてパオ型が採用されるという可能性も、まずみいだせないであろう。なぜなら、つくりつけの骨組みをもちいるパオ型が、移動住居として役に立つためには、モンゴリアの草原のように、車を利用しておもい骨組みを、どこにでも自由にはこびあるくことができるという條件が必要であって、森林のなかでは、その運搬の困難をあえてするよりは、いたるところで自由に手に入る即席の材料を骨組みとして、從來どおりの円錐型ユルタをつくるほうが、はるかに移動生活に適しているといえる。してみると、たとえ見た眼には貧弱ではあっても、この形式の持続は、森林内での狩猟生活と密接にむすびついた、いわばひとつの適應形態であると考えることができよう。[5] 家具の貧弱さも、やはりおなじように、森林の移動生活につきまとう運搬の困難さと切りはなせないことがらであるとするならば、問題はむしろ、いままでかれらが他の生活様式に接触する機会をおおくもちながら、なぜその「狩猟＝トナカイ飼養」による移動生活を、今日までもちつづけてきたか、という点に帰着する。傳統がたやすくはあらためることのできないのはもちろんであるが、外の世界の変化にふれ、その影響をこうむりながらも、なおかつそれを持続できるためには、やはりそれを可能にする條件の存在を考えなければならないであろう。この点については、のちに、もう一度ふれることにしよう。

ユルタのあたりでしばらく拳銃の試射をしてみたり、子どもと遊んだりしたのち、ふたたびルカシカとともに駐在所へと引きかえした。これからいよいよ、このオロチョンを同行さす交渉をはじめなければならない。すこしなじみができてからと思って、朝のうちはわざと話をさしひかえていたのである。オロチョンはロシア語をよく話し、われわれのつれてきた馬夫のなかのひとりもロシア語ができたので、関さんをよんで、二重の通訳で話をはじめた。ときどきは、まだるっこくなって、わたくしの片言のシナ語と、おなじく片言のルカシカのシナ語

とで、直接話しあったりもした。かれは、なかなか承知しそうにもなかった。家族をほっとくわけにはゆかない、というのである。わたくしは、家族はつれていってもいいし、またここにおいてゆくなら、駐在所の新井警士に話して、困らないようにしておこう、と約束した。問答のすえ、やっとかれは承知し、家族はのこして、男の子ひとりとトナカイ七頭だけをつれてゆくことになった。七頭のトナカイでは、馬の数をへらすのにはたいして役に立たないけれども、すくなくともトナカイをつかう試験台にはなるだろう。それに、オロチョンをつれてあるくことそのものに、なんとしても魅力があった。この交渉が成功したことは、一日滞在のマイナスをつぐなって、あまりあるものであった。

まだ日が高かったので、部落を一とまわりしてみた。はば一〇メートルばかりの道を中央にはさんで、三〇戸ばかりの家が両がわに立ちならんでいるのが、部落のほとんど全部であった。採金のさかんだったころの繁栄は、もはや見るよしもない。家々は、どれもおなじ平入りの切妻づくりで、かべは丸太を組みあわせ、そのうえに泥をぬってすきまをふさぎ、屋根は板ぶきで、高さはひくく傾斜はゆるかった。いまは、一二〇人ばかりの採金夫がここに住んで、附近の採金地にでかけ、数名ずつ組をつくって、砂金を掘っている。掘った砂金は、ここの採金会社事務所で買い上げている。

図 54.　ラオコウの部落——モーホ共和國の末路.

はなやかなりし昔のなごりをとどめているものは、村の入り口の門と、その近くにある廟だけにすぎなかった。部落のうしろの丘にのぼってみると、山々はななめの日をうけて赤くかがやき、家々の屋根から、まっすぐに煙がたちのぼった。ほとんどカラマツの切りつくされた丘のうえは、廣葉樹の若木の新緑と、ムラサキツツジの花にうつくしくいろどられていた。

〔註〕

① ハンダハンの皮に油をぬって、足のかたちにぬったもの。たびたび修繕しなくてはならないが、ひじょうに軽い。馬オロチョンも、ほとんどおなじものを常用する。

② モトカンとよぶ。道をあるくときは、これで、道の右がわの木になた目をつけてあるく。

③ もっとも、われわれが帰途に訪問した、長期滞在用のユルタには、もうすこし家財がゆたかであった。そのおもなものは、これらのほか、ガラスコップ、コーヒー茶わん、スプーン、アルマイト製食器、アルミなべ、フライパン、ハンダハン製はし入れ、金しゃくし、食事台、西洋ばさみ、鏡、木製物入れ、シラカンバおよびハンダハン皮のハンドバッグ（ドクトワリ）、ゆりかご（オムコ）、カレンダー、キリスト像などであった。

④ 一ヵ所にすこしながく滞在する場合には、ユルタの骨組みのうえに、夏はぬいあわせたシラカンバの皮を、冬はハンダハンの皮をはる。また入り口には、下に板を立て、上には布をたらす。入り口の向きは、ねるとき頭の高くなるよう、川のほうにむけるという。

⑤ この点については、今西錦司・伴豊（一九四八）前出、二五―二九ページ、にくわしい。

難　行

ラオコウ街道をはなれて、山道にはいったとたんに、にわかじたての駄馬隊は、たちまち「馬脚」をあらわした。川をよこぎって南方の山につづく軽濕地で、はやくも馬の足なみはとどこおりはじめた。荷物をおとした一

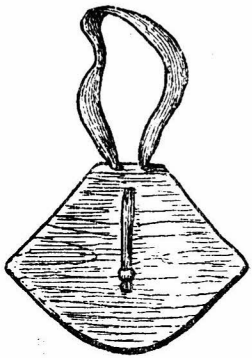

図 55.　トナカイの鈴.
木製，鉛のたまを皮ひもで両がわにつるす.

頭の馬が、やっとあるきはじめたと思うと、もうむこうではべつの一頭が立ち往生していた。二三頭の馬には、故障のたえまもない。とうとう一頭は、ふかいぬかるみに足をとられてすわりこんでしまった。総がかりで、おしたり引いたりしたあげく、やっと立ちあがらせて荷物をつけなおし、また行進をはじめるまでに、どれだけの時間がかかったことだろう。

このさわぎをよそに、トナカイの列だけは、くびにつけた鈴の音をひびかせながら、いとも軽快に濕地をとおりぬけていった。トナカイの背には、リュックサックや米など、四—五貫ずつの荷をつみ、一列につないで、ルカシカが先頭のたづなをひき、列のうしろに、かれの子どもがついた。仔ジカは、母シカによりそって、かわいいかっこうで、おくれまいとついてゆく。草をわけ、ぬかるみをこえてゆくトナカイの足どりは、かたい地面をゆくときとすこしもかわらず、さながらすべるようだ。地面をふみしめるとき、ふたつにわかれたひづめが、ぐっとひろげられて、泥にもぐることがすくないのである。トナカイの列と馬の列との距離は、みるみるうちにひらいてしまって、すこしゆくごとに、行進をやめて待たせなければならなかった。

登りにかかれば、すこしはらくになるかと期待していたが、ここの山道は、ラオコウ街道とちがって、せまい、けわしいぬかるみ道だった。一度馬がすわりこむと、傾斜があるだけ、よけいぬけだすのに骨がおれた。見とおしのきかない林のなかのジグザグ道のあちこちに、馬はばらばらになって引っかかっていた。尾根に近くなると、ようやくぬかるみは去ったが、こんどは、両がわにぎっしり生いしげったカラマツやシラカンバの若木が、行進のじゃまをしはじめた。道がほそいために、ちょっとすすむと、すぐ馬の荷に枝がひっかかった。枝を

きりひらくまに、うしろにはつぎつぎと馬がつかえ、さきの馬があるきはじめると、こんどはうしろの馬が、べつの枝にひっかかった。ラオコウをでて、まだいくらもあるいていないのに、すでに馬はつかれきって、足どりはのろかった。まだ日暮れにはかなり間があるが、この尾根をこえた予定の谷までは、とてもゆきつけるみこみはなく、この山腹でキャンプ地をさがさねばならなくなった。航空写眞にも、これといってよさそうな草地はみあたらなかった。やがて、前方に、シラカンバのすこし太いのが、ひとかたまり茂っているのがみえ、近づくと、草地というほどにもあたらない、ちょっとした空き地があらわれた。ここを最初のキャンプ地ときめると、馬夫たちは、よろこんで荷をおろし、ルカシカは、トナカイをつれて、ハナゴケをさがしにでかけた。シラカンバの幹にかこまれたテントは、みた眼にはきもちよさそうだった。馬夫たちは、枝をなん本も地面にななめにつきさし、片屋根のすまいをつくった。

図 56.　漢河隊のはじめてのキャンプ.

夕食は、ジャガイモをおかずに、せんぎり大根をたきこんだ味つけ飯であった。われわれは、主食こそ豊富にもっていたけれども、副食は、一俵のせんぎり大根がたのみの綱で、ほかに干魚やジャガイモなどが、わずかあるにすぎなかった。調味料はいろいろそろえてあったが、もし野生動物があまりとれなかったら、あらゆるくふうをこらし

て、せんぎり大根を調理する以外に、方法はないのである。さしずめ、きょうがその第一日だったが、そのかわり食後には、例のごとくようかんを出し、茶をたてた。関さんもよろこんで飲んだが、ルカシカだけは、ちょっとなめて、浮かぬ顔だった。

馬夫たちには、ひとり一日分九〇〇グラムのメリケン粉を、塩や油とともに配給した。粉は、純白の一等白麵(パイメン)で、連中はおおよろこびだった。関さんは、じぶんから進んで、ひとり馬夫たちのところへ寢にいった。まだ氣心のしれぬ連中の動向が、氣になったのであろう。モーホでの人心不穩の話は、まだ耳のそこにこびりついていて、万一をおもんばかって拳銃をまくらもとにおいた。羽根のねぶくろに入れば、寒さを感ぜずに眠りにいった。

夜があけると、小雨になっていた。炊事の煙は上ったけれど、しめったテントのなかは、ぞくぞくと寒く、氣分はわびしくもうっとうしい。おまけに、馬が一頭ラオコウへにげかえったらしく、とうとう一日滯在となった。夕がたの無電は、支隊がいよいよ本隊とわかれて出発したことをつげた。われわれも、あまりぐずぐずしているわけにはゆかない。しかし、一日一〇キロにみたない行進が、これからもつづくとすれば、基地につくのはいつのことになるやらわからない。事態は、楽観をゆるさなかった。

あくる朝は、天氣もよくなり、はやくに食事をすませたけれども、出発の準備がおくれ、出発は九時すぎになった。馬夫の要領がわるくて、馬をあつめて駄載をおわるまでに、二時間もかかっているのである。荷物係りの江原が、叱咤激励したけれども、さっぱりきめがなかった。しかし、きょうは、隊員ふたりにおのやのこぎりをもたせて先行させ、道の切りひらきをやらせたのがきいて、おとといよりは、道のりがはかどった。それでもやはり、荷物をおとして立ち往生するものが続出した。

ひるめしのとき、わたくしは、隊員の晝食用にとモーホで燒かせてきたロシアパンを、馬夫たちにも特配した。よろこんで食べおわるのをまって、かれらをあつめ、関さんの通訳で、どうして行進がはかどらないと思うか、とたずねてみた。一同は、口々に、道がわるいとか、ひとりに二頭では手がまわらないとか、のべ立てはじめた。しばらくだまってみんなの不平をきいてから、わたくしは、口をはさんだ。それは、みんなが助けあわないからだ、ひとりが荷をおとしてこまっていても、ほかのものは知らぬ顔をしているから、よけいに時間がかかるし、つみなおした荷物もひとりだからしめかたが足りなくて、すぐおちるのだろう、というと、みんなはうなずいた。ほかの者のしごとに手をかさないのは、相手の面子（メンツ）を立ててのことだろうが、いまの場合は、もっと協力してやらなければ、けっきょくみんなが困ることになるのでないか、と話してみると、馬夫たちはよく了解して、これからはそのとおりすると約束した。これが効を奏したのか、午後の行進は、ずっとらくになった。荷をおとした馬には、うしろの馬夫がはせつけて、ふたりで荷なおしをする光景もみられるようになった。部落からとおざかって、伐採の手がとどかなくなったせいか、若木がすくなくなって、木の間隔もひらいてきた。このぶんなら、このさきもたいして心配はいらないだろう。わたくしは、内心ホッとした。

道は、尾根をくだって、モトカシの谷に近づいていた。この谷をくだり、モンドリの谷との出合いから、峠をひとつこえたところが、第一目標である棲林集（チーリンジ）の部落のはずだ。しかし、夕がたちかく、道路の偵察にでかけていた川添がかえってきて、前方に修理を要する橋のあることを報告したので、谷にでないでそのまま荷をおろした。川添は、二—三人の馬夫をつれて、あかるいうちにと、橋の修理にでかけていった。

チャン・クェイ・タン

つぎの朝、わたくしは、加藤や本郷さん、関さんたちと、キャンプのあとの焚き火をかこんでいた。駄馬隊はもう出かけてしまったあとで、われわれは、「四不像（スプシャン）」をさがしにいった、ルカシカ父子をまっていた。スプシャンというのは、このへんのシナ人のトナカイにたいするよび名で、もちろん、ほんもののスプシャンのことではない。[1]「スプシャン」どもは、夜のあいだに、ハナゴケをさがして、どこかへいってしまったらしい。

ルカシカののこしていった焚き火のうえには、やかんがかかっていた。そのかけかたは、すこしかわっている。まず四メートルばかりの細い木を切り、一端をななめに地表にさし、組みあわせた二本のほそい棒で、そのなかほどをささえ、つきだした他方の端を、焚き火のうえに出して、そこにやかんをかけるのである。立ち木をきりたおしたときは、こずえのほうの枝や葉をはらわずにおき、その重みだけでつりあわせて、地表につきささないこともおおい。これなら、長さも方向も自由に変えることができ、いかにもかんたんで、要領のよいやりかたであった。日本の山人がよくやる、三角形に木を組みあわせ、その頂上からやかんをつるす方法は、組みあわせがやっかいでひもや針金がいるし、両がわに石をきずいて棒をわたし、それにかける方法は、取りはずしが不便である、石や土でかまどをきずくめんどうをさけるとすれば、このオロチョン式方法は、簡便さにおいて森林地方にうってつけであろう。材料からいえば、日本の山でもじゅうぶん適用できるこの方法が、現に日本ではおこなわれていないということは、さきのユルタの形式の場合とはちがって、ただ、そのような傳統を日本では傳えていない、もしくはその方法をまなぶ機会がなかったというだけのものではないか。このかんたんな一例のな

かに、ふたつの民族のもつ文化様式のちがいが見いだせるのは、なかなか興味がある。もし、われわれがこの方法を日本の山でもこころみ、山人たちにつたえたならば、それはしだいに日本でもひろがってゆくかもしれない。いわば文化の傳播に関するこの実験を、わたくしはちょっと試ろみてみたくなった。これは、都会生活における衣食住の近代化の問題とはまたちがって、原始文化の交流変遷に直接つながる実験になりそうに思われる。

とつぜん、朝のしずけさをやぶって、銃声が林にこだました。すぐつづいてまた一発。方角はわれわれのやってきたほうであるから、さきに出発した駄馬隊のはなったものではない。大興安嶺ににげこんだといわれる匪賊の話がちらと頭をかすめた。しかしそれきりで、林はふたたびもとのしずけさにかえった。何者だろうかという疑念で、われわれはたがいに顔を見あわせた。そのとき逆の方向から、ルカシカがかえってきた。ルカシカも、いまの銃声をきいていて「あれは、たれかがわれわれにむけてはなった合図だ」と説明した。かれらのあいだでは、なにかの場合の信号用には、二発つづけて発砲することになっているのだという。ルカシカのすすめで、わたくしも拳銃をとりだし、空中に二発の銃声をひびかせた。

待つほどもなく、よごれた軍服にゲートルを巻き、警察官の略帽をかぶった六〇すぎの背のたかい老人が、ひとりのオロチョンとともに、林のあいだから姿をあらわした。オロチョンは銃を肩にしていたが、老人は、雑の

図 57. 焚き火とチャン・クェイ・タン.

うを下げただけの軽装で、わたくしのまえまでくると立ちどまり、直立不動の姿勢をとって敬礼した。これが、われわれのさがしていた張貴堂（チャン・クェイ・タン）警保であった。チャンさんは、奥地からこのオロチョン（名をヤーゴといった）といっしょに帰り、われわれがさがしていたことをきいて、すぐあとを追ってきたのであった。わたくしはその労をねぎらって、われわれがオロチョンとそのトナカイとをやとい入れたいと考えていることを説明した。チャンさんはヤーゴとなにか相談していたが、とにかくチーリンジまでゆけば、オロチョンは集まってくるから、そこまでいったうえで交渉してみよう、といった。ヤーゴは、モーホ方面のオロチョンの頭目②なのであった。

チャン・クェイ・タンの身のうえばなしは、フロンティアの歴史のひとこまとして、興味あるものがたりであった。われわれに問われるままに、かれは、そのあらましをものがたった。かれは、ことし六二歳、河北省昌黎の農家にうまれた。一五歳まで、家の百姓しごとをしていたが、その年、商家の炊事夫にやとわれて、錦州にうつった。二四歳で妻をめとったが、四年で死にわかれた。三二歳になったとき、金掘りをめざしてモーホにきた。錦州から黒河までは徒歩、あとは船でようやくモーホにたどりつき、採金会社の廣信公司にやとわれた。明國二年（一九一三年）のことである。そのころのモーホには、農民はひじょうにすくなく、もっぱら雑貨商がさかえていたというから、金坑への門口として、商業交易の中心をなしていたのであろう。もちろんこのときには、ジェルトゥガ共和國はとっくにほろびており、北清事変もおわったあとだから、ロシアがわとの交易はすくなく、雑貨はおもに黒河からはいっていた。採金会社にはいると、すぐラオコウへつれてこられ、ここで七年間金掘りをした。そのころ、ラオコウの住民は六〇〇—七〇〇人くらい、採金夫を主とし、そのほか雑貨商が七—八軒、娼家が二五—六軒、女の人口は全部で四〇人くらいであったというから、村の性格はほぼ推察することができる。

一九二〇年になって、チャンさんは採金夫をやめ、猟師に轉向した。そのころシナ人の猟師は一〇人おり、そのほか、ときどきリスとりをやる程度のものが十数人いた。ロシア人も、けものとりに入っており、その数も六—七人はいたという。猟の中心地はラオコウ附近で、アカシカ、ハンダハンなどを対象とし、ノロはまったくいなかった。ただし、それ以前にはいくらかすんでいたが、オオカミによって絶滅させられたという。もしこれが事実とすれば、興味ふかいことである。猟には、すべて銃をもちい、弾丸はモーホで買うことができた。冬になると、リスとりにでた。リスとりには、チーリンジまでかけたが、かれは、おおいときで一と冬に三〇〇、すくないときは一〇〇くらいはとることができた。ほかの猟師では、おおくて二〇〇くらいだったが、ただ姜樹槐という男だけは名人で、五〇〇もとった。夏の猟高は、およそアカシカが一—二頭、ハンダハンは三—四頭から五頭くらい。賣り値は、リスが一頭一円八〇銭ないし二円、アカシカは二〇〇—三〇〇円、ただし袋角のおおきなのは五〇〇円、しっぽは二〇円くらい、皮は一〇円くらいに賣れた。ハンダハンの皮は、二〇円くらいのねうちがあった。このねだんで、さきのとれだかがあれば、猟だけでらくに生活ができた。

かれが猟師になった年には、チーリンジにはシナ人の住むものもなく、ただオロチョンだけの世界であった。棲林（チーリン）とは、オロチョンを意味する。モーホ・オロチョンの人口は、そのころ五〇人くらい、七—八家族にわかれ、フェリーバというシャーマンが頭目になっていた。オロチョンは、ひとり一と冬にリスを七〇〇—八〇〇もとり、モーホの永泰和という毛皮商へ賣りにきていたという。満洲國ができてから、かれは猟師をやめ、警察にはいった。そのころ、山にあかるい警官は、かれのほかにふたりいて、事ある場合の道案内をつとめていたが、いまはそのふたりとも死んでしまい、じぶんだけが山に関するしごとをうけもっている、とチャンさんは話をむすんだ。

いつのまにか日も高くなっていたので、われわれは、あわてて立ちあがった。駄馬の列には、まもなくおいついたが、あるけどもあるけども、カラマツの林はつきるところを知らなかった。もはや木はそれほど密生もせず、どこでもらくに馬が通れた。あおげば、若葉の枝のあいだからあお空がのぞき、幹や枝の影のこい地表には、イソツツジの葉が一めんにおおっている。そのなかを、一とすじのほそ道がまがりくねって、林のおくに消えていた。ちょうどどこかの公園のなかを思わせるこの風景こそ、大興安嶺の典型的なカラマツ林であった。

図 58.　リスとりのわな.

空き地があるなとおもうと、そこには切りたおされた木が横たわり、オロチョンのユルタの骨組みがひとつ、ポツンと立っていたり、あるいは、対子(トイズ)とよばれる小獣とりの古いわなが、朽ちかけたまま残っていたりした。横たえた長い丸太のうえに二列に小さなくいを打ちこみ、そのうえにもう一本の丸太がかさなっているのは、リス用のわな、丸太が一本だけでその先端にくいを打ちならべ、おりをつくってあるのは、テンやイタチなどの肉食獣用のわなのなごりであろう。[3] しかし、あたらしいわなはついに見あたらなかった。

われわれは、モトカシの川ぞいに下っているはずだが、道は、谷そこの湿地をさけて、ゆるやかな山腹をとお

っており、夕がたになって、やっと流れのふちにでた。きょうは馬の調子もよく、わたくしの腰の痛みも、ふつうあるいていてはほとんど感じなくなっていたが、モンドリの合流点にはまだとおく、この夜もモトカシの谷に寢なければならなかった。暮れがたには、微少なヌカガの群れが、ひとりひとりをとりまき、露出した皮膚をおそっては血を吸い、われわれをなやました。

〔註〕

① ほんもののスプシャンというのは、*Elaphurus davidiana* というシカで、シナ原産であるが、野生のものがほろびて数千年になるといい、いまでは全世界にほとんどのこっていない。四不像の名は、蹄はウシに似てウシにあらず、頭はウマに似てウマにあらず、胴はロバに似てロバにあらず、角はシカに似てシカにあらず、という形容からでている。

② いまでは、二—三年ごとに、選挙によって決定される。

③ 小興安嶺地方のシナ人獵師は、前者、すなわち二本の丸太のあいだにけものをはさむ仕掛けを、林子対（チャオツトイ）とよび、後者、すなわち丸太と地面とのあいだにけものをはさむ仕掛けを路対（ルトイ）とよんでいる。前者では、上がわの丸太の一端をもちあげて、下の丸太をけものが走るときに落下する裝置になっており、後者では、やはりおりに接したほうの丸太の端をななめにもちあげておき、おりの中のえさをけものが引くと落下するようになっている。

チーリンジへ

いままで二日間、キャンプ地での馬夫たちの出発準備をみてきたので、そのてまどる原因がのみこめてきた。そのひとつは、草をもとめて散らばっている馬を、出発まえになってから、あわてて集めにかかるからであった。そこでわたくしは、朝おきるなり馬夫たちのところへでかけ、炊事に関係していない連中を、すぐ馬集めにやり、馬が集まると、さきに鞍だけをおかせた。食事がすむと、ふたりずつを一と組にし、荷づくりと荷つみと

を一頭ぶんずつ順番にやらせた。荷づくりを解いてない荷にあたった組には、かわりに、テントそのほかのあとかたずけをさせることにした。この方法の効果はてきめんで、いままで食後二時間もかかっていた出発準備が、この朝は三〇分くらいですんでしまった。

ふたたびカラマツ林の行進。チャン・クェイ・タンは、杖をひろって飄然とあるき、ルカシカは、にこにこしながらトナカイをひいてゆく。ただヤーゴだけは、むっつりと、銃を肩に足をはこんだ。ひるにならぬうちにモンドリの谷にでて、はば三〇メートルばかりの増水した流れをわたった。対岸は、一めんの野地坊主の原であった。馬オロチョンの馬は野地坊主のうえでもわたってあるくといわれているが、なれないわれわれの馬には、そんな器用なまねはできず、坊主のあいだにふみ場所をもとめて、ひと足ひと足ふみしめてわたった。いまはまだ野地坊主のあいだに水もすくなく、土もわりあいにかたくて、たいしてもぐらずにあるくことができた。それでも、濕地のまんなかあたりまでゆくと、水たまりもあらわれ、野地坊主をふみはずすと、ひざまで黒い水のなかにおちこんだ。馬は難行したけれども、荷のつみかたがよくなったので、荷をおとすものは、ほとんどなくなった。野地坊主のうえには、あたらしい芽が、もうかなりのびていた。

図 59.　モンドリの流れをわたる.

濕地をわたり、森林の行進をなおもつづけるうち、とつぜん林がとぎれ、ゆくての丘とのあいだの低平地に、おおきな、だえん形の雪田があらわれた。左右のひろがり三〇〇メートル、前後は一五〇メートル以上もあったであろう。空はくもって、雪面の反射はひどくなかったけれども、暗色の木肌ばかり見なれてきた眼には、うちひらけた純白のながめが、はっとするようにあざやかであった（図44）。ふみこんでみると、それは、雪というよりも氷にちかく、かたくしまったその表面は、靴のうらをはねかえした。まんなかまででると、はば一メートルばかりのみぞができており、すんだ水がなかを流れていた。雪面から水面までおよそ五〇センチ、水の深さもほぼおなじくらいと思われたが、底はまだ地表に達せず、あおい氷の色をみせていた。このみぞは、山腹からの流れ水の通路であろう。かえり道にもう一度この場所をすぎて、本隊員たちと意見をかわすまでは、この雪田の成因についての、はっきりした推定はできなかった（二一八—二一九ページ）。

雪田をすぎて、道はしだいに登りとなり、チーリンジ盆地への峠にかかった。峠のちかくでは、林相がかわって、シラカンバの若木がおおくなった。展望のために、左手の高みにのぼってみると、前年に測量隊のはいったあとらしく、若木がいたるところ切りたおされていた。このあたりの高度は、八〇〇メートルくらいであろう。山なみのしだいにひくまってゆくはるかかなたに、アルバジハ河の谷にそうた、チーリンジの盆地がうちひらけている。ところどころ白く光るのは、沼か河か。盆地のつきるあたり、これをとりまいておりかさなった山また山が、どんよりとくもった空にとけこんでいた。

盆地に近づくにつれて、ふたたび平坦な森林がつづいたが、ところどころ根こそぎになってたおれたカラマツをみうけた。風のためであろうか。その根系は、根もとからすぐ水平にひろがり、ほとんど地下にはもぐっていなかった。凍土層が、垂直方向への根の発達をさまたげているのであろう。この原始林の木々が、あんがいに大

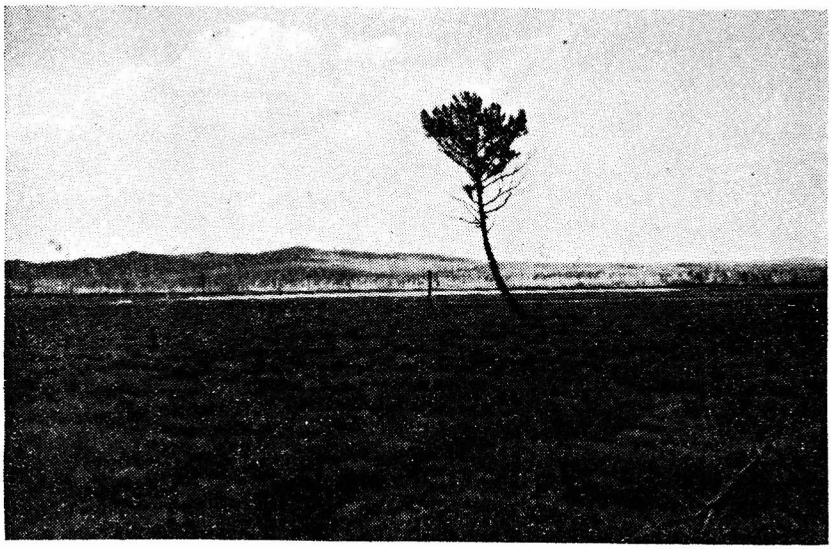

図 60. チーリンジ盆地.

木にとぼしいのも、この根をみれば、なるほどとうなずかれた。

やがて、忽然として視界がひらけ、ひろびろとした草原のまえに立った。原のなかには、カラマツの独立樹や、あるいは小さな木の群れが、点々と散在して、ながめの單調をやぶっている。地面はやや濕地性をおび、かわいた、ひくい野地坊主のひろがっている部分もみられた。原の中央には、ちょっとした林がしげり、近づくと、その手前に、うつくしい三日月沼がしろくかがやいた。天候は回復し、夕ぐれの空には、白い雲がぽっかりと浮び、むらさき色にそまった山々が、原のかなたにのびひろがっていた。数日を森林にあけくれてきたわれわれには、さながら別世界にでた感があった。

しかし、この絵のようなながめを、ろくろくたのしませてくれなかったものは、ヌカガの大群であった。大興安嶺の吸血性昆虫の先駆であるこの小さな虫の群れは、われわれの顔のまわりをおしつつんで、ちらち

らととび交い、耳、くびすじ、のどなど、いたるところにとまっては血をもとめた。かゆさに耐えかねて、捕虫網を顔のまえにふりまわすのだけれども、虫の群れはいっこうにへる様子もなく、はてはあきらめて血を吸わせるままにした。アブとちがって、痛みのないだけはましであった。

まもなく耕地があらわれた。かわいた野地坊主の濕地に接して、あさくすき起された土の列が、ひろい原野に長々とつづいている。そのような列があちこちにあらわれ、そのむこうに、木柵と人家の屋根とが、小さく眼にうつった。これが、大興安嶺のなかに、もっともおく深くはいりこんだ農業部落、チーリンジの村であった。

トナカイ・オロチョンの墓

チーリンジの草原にでるすこし手前で、道からちょっとはずれた林のなかに、ふと異様なものが眼をひいた。地面のうえに、板で長さ二メートルたらずの切り妻の屋根をつくり、その一端に十字架が立てられていた。十字架には、ななめのみじかい横木がそえられてあったから、それは一見してギリシャ正教徒の墓だとわかった。チャンさんにきくと、オロチョンの墓だといった（図版一四ページ）。トナカイ・オロチョンたちは、すべてギリシャ正教に帰依しているのである。

もともと、トナカイ・オロチョンは、昔からの大興安嶺の住民ではない。ヤーゴたちの話では、いまから一〇〇年ほどまえ、祖父の時代に、マカルフという頭目にひきいられて、シベリアからわたってきたものであるという。その原因は、シベリア開発にともなう、けものの減少であったと思われるが、そののちも比較的最近にいたるまで、シベリアとの往き來は、しばしばおこなわれていた。たとえば一九一〇年のアマザール河地方よりの六

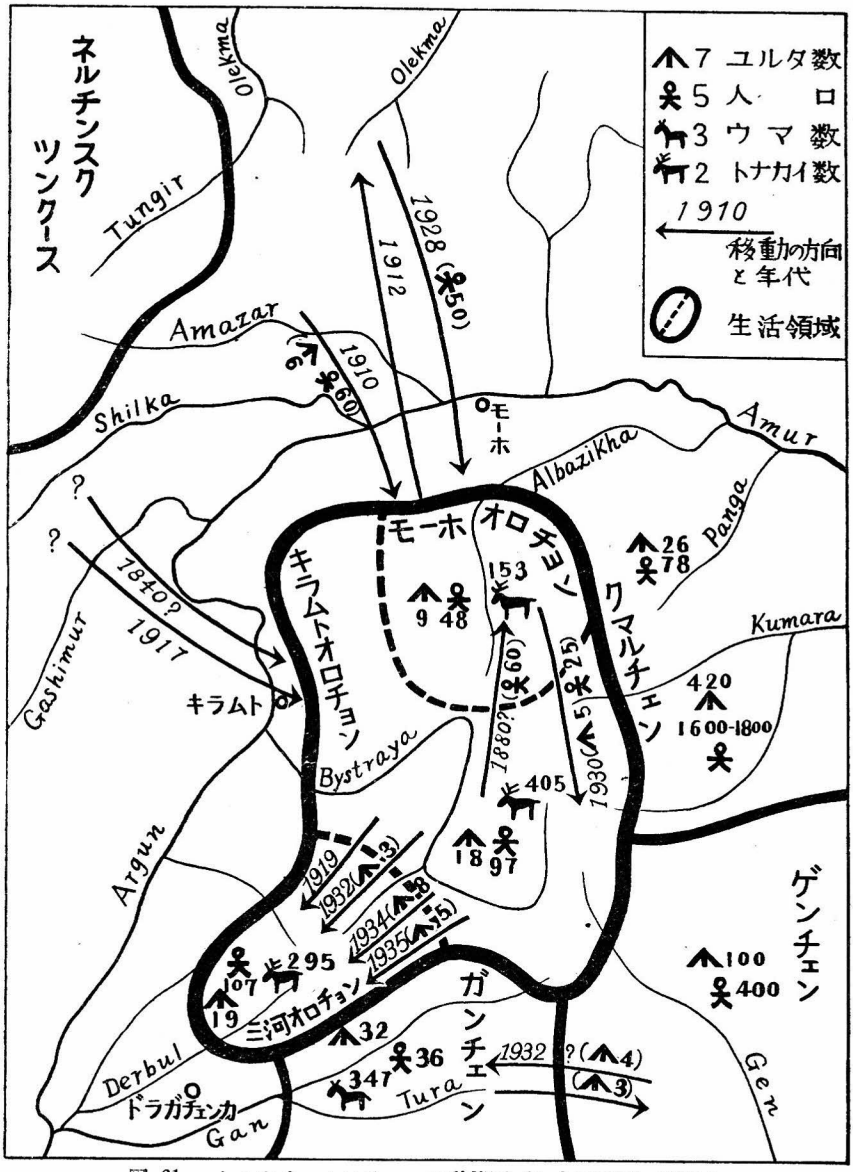

図 61.　トナカイ・オロチョンの動態図（おもに1938—39年の治安部調査と，われわれの調査とによる）.